

<p>団体名</p>	<p>不登校・中退・ひきこもりの若者や家族のための未来塾</p>		<p>団体名</p>	<p>NPO法人岡山高等学院</p>		
<p>1年間の活動 (アウトプット)の目 標 (事業全体)</p>	<p>発達障がい者、学力不振、不登校、ひきこもり、高校中退者、大学中退者やNEET（ニート）などの児童・若者が将来の自分を探し学んでいくための課題を見つけることができるように、そして、保護者の不安や悩みを解消できるように関係機関が連携し、それぞれの特性を生かした活動を通しての自立を支援するため未来塾を開く。 ・前島研修（10月に1泊2日） ・蒜山研修（1月に1泊2日） ・親子相談会（9月、10月、12月、2月に一回ずつ開催）</p>					
<p>■ 活動報告</p>			<p>■ 1年間の目標に対する達成状況</p>			
<p>【親子キャンプ】 キャンプでは、参加した子どもたちがパニックを起こすことなく、他の家族やボランティアスタッフ、学院のスタッフともコミュニケーションが図られ、楽しく活動に参加でき、全員がまた参加したいとの旨をアンケートに記述した。 1回目の家族キャンプには2家族が参加（①両親と本人、②母と本人と兄、③どちらも不登校で1名は発達障がいの診断）し、1日目は工作と染色、バーベキュー、2日目は手打ちうどんに挑戦、それを自然の中で家族と一緒に食べることで、緊張感は薄れ、他のスタッフと一緒に活動することができた。 母親の感想のなかには、「我が子の楽しそうな姿、私以外の人と関わっている姿、話しかけている姿をみて、気持ちが楽になった」とあった。 2回目のキャンプは、前回の2家族に加え、計4家族が参加（①母と本人、②両親と本人<行き渋り傾向>と弟）した。雪が降る中で、最初から最後までソリや石像づくりなどで思いっきり体を動かしていた。その後、牧場で子牛にミルクを飲ませたり、草を与えたりする中で、「におい」の体験をした。2日目はオカリナ絵付けや「そば打ち」を体験で作ったそばをおいしそうに食べるなど、はじめての体験に意欲的に取り組んでいる様子が見られた。 1回目のキャンプと2回目のキャンプに通して参加した子どもは、スタッフとのコミュニケーションがよりスムーズになり、問いかけにも自然に応じていた。</p> <p>【親子相談会】 4回開催した親子相談会でも、工作やそうめん流し、もちつき、うどん作り体験など子どもの状況や事情に合わせて適切に対応することで楽しく参加していた。普段と違って積極的に取り組んでいる子どもの様子を見ることができ、保護者も今後への不安が軽減できたと思える感想を寄せている。</p>			<p>親子相談会では、回を重ねるごとに参加者家族が増え、次回への参加希望も増えていった。子どもも保護者も共に、今後に向けて不安や悩みを軽減していくことが不可能ではないと実感できた。考える。 また、キャンプや相談会後に他の場所等で参加した子どもと再会したときに、本人からあいさつをしてくれたり、他の団体の行事への参加が増えたりしている。学校以外ではあるが、確実に家以外で社会に参加し、つながりを持つ場所を見つけている様子が伝わってきている。</p>			
<p>■ 1年間の活動のまとめ</p>			<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p>■ 実施した人材育成策</p>	<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>
<p>家族相談会、親子キャンプを通して、当事者と保護者、そして支援者が共に活動することによって、短時間であっても互いに様々な交流ができ、信頼関係が生まれ、今後への希望につながっていくことが分かった。</p>			<p>活動内容の企画にあたっては、①親子で一緒に活動しやすいこと、②時間配分にゆとりがあること、③今までに経験したことがない活動の場合には、参加者が達成感を十分感じることができるものであることを大切にしておき、支援者側としては、その活動の実施経験やノウハウを蓄積し、失敗のリスクを極力少なくするよう意識合わせを行っている。そのうえで、事前に十分な準備と打ち合わせを行い、必要があれば活動場所の確認やリハーサルをしておくことが必要である。（①うどん作り、そば打ち体験、工作、染色などの活動も、上記の観点から選出、事前にスタッフや、参加する子どもと行動を共にする学院の生徒たちとうどん作りや工作を実際にやってみて、注意点等共有している）実際の活動に入ってからでも、スタッフの気づきでプログラムを柔軟に変更できるよ、ゆとりのある計画を立案し、活動がスムーズに進行するために導入の段階で子どもたちが興味を示してくれるよう、「みんなもできるよ」という雰囲気を与える方法を工夫している。また、活動中にも保護者からの質問、疑問に対応できる体制をとっておく。保護者からの問いかけに対しては、状況を共有して、できるだけその場で答えていくことで、安心して任せられるように配慮している。</p>		<p>①事前の準備の段階から、話し合いだけでなく、体験活動など必要なことはすべてスタッフで実際に体験する。本番に向けて疑問点を解消できるまで、場合によっては繰り返す。 ②支援者が楽しくなければ当事者にその楽しさは伝わらないことから、自分たちも楽しめるよう各自が自分なりの工夫を行い、実行してもらおう。そうすることによって子どものアイデアを引き出しやすくしている。（工作や染色、雪山や海辺での活動） ③どんな些細なことでもめんどくさくならず、子どもの目線で一緒にやってみる。これらの取り組みを通じて、着実にスタッフが育っている。</p>	<p>この1年間の活動を通じて 当初の予想を超える目標 を達成しました。</p> <p>■ 受益者の変化（効果測定結果等） アンケートや記録表の記載事項、その後の連絡等で、最初の参加の時からほぼ一年たった状態を「I.C.F※（国際生活機能分類）」の関連図に整理、記入してみると変化がはっきりと見えてくる。当事者たちは様々な要因により、他者とうまくコミュニケーションできず（行動制限）、学校や地域の行事等に参加できない（参加制約）状態にあったが、今回のキャンプや相談会に参加し、支援者やボランティアスタッフからの理解ある支援（環境因子）を受けることにより、楽しくやったらできたという達成感を味わいつつ、またやってみようという意欲（個人因子）が生まれ、あきらかに生活機能の向上が認められる。 ※ICFについては、別添資料を参照。</p>
<p>前島研修 布の藍染</p>			<p>参加児童とその親、学院生徒、支援スタッフ、ボランティアと一緒に一つの活動に取り組む</p>			
<p>親子相談会 工作体験</p>			<p>参加児童と支援スタッフが共に活動をし、その様子を保護者が見る、悩みを相談スタッフに話す</p>			